Troilus and Criseyde の *blak*

佐々木冨美雄

Chaucer の word-play の一つになるかも知れないが *Troilus and Criseyde* (以下 TC. と略す) において広義の対立表現が作品全体の構成と文体の形成に関係している語が見られる。それは light, sun, sterre に対しての blak, cloud の役割であり，光と闇のイメージのコントラストである。light は TC. の中に形容詞，副詞，名詞などに形態の上で28回でてくるが，ここで問題にするのは光を描出する light と闇を描出するblak とである。(1) しかしこれらの関係は直接的にも間接的にも word-play (2) の世界から見るとどうしても全体として考えざるを得ない場合が多い。その light とか sun を陰らすものにcloudがある。それらは blak と共に使用されておりその例は，"under cloud blak" (TC.-1-175)，"cloude of errour" (TC.-4-200) など6回であり，若しろ，これらを通して表現されている derke が対立している。この研究ノートの中で問題にしている blak そのものは "In widewes habit blak" (TC.-1-170)，"That stood in blak, with lokyng of hire eyen," (TC.-2-534) 等12回である。さてこれらの語がどのように全体と関係があるのか見てみよう。

Owt of thise blak wawes for to saylle,
O wynd, o wynd, the weder gynneth clere;
For in this see the boot hath swych travaylle,
Of my connyng, that unneth I it steere.
This see clepe I the tempestous matere

Of disespeir that Troilus was inne;
But now of hope the kalendes bygynne.

(TC. 2-1～7) [3]

これはTC. の第二巻における最初のスタンザであるが，このスタンザの〝暗き海原〟とは何なのか，それに続けて物語の Narrator は "the tempestous matere / Of disespeir that Troilus was inne;" といっているが，それは Troilus と Criseyde が愛の大海原を闇雲に突っ走る世界である。それはこの TC. が最初から暗示した主題の "The double sorwe of Troilus" を語ることがテーマであったのを想起する時，第二巻は Troilus と Criseyde の愛の展開と関係して来る。この愛の進展は Anglo-Saxon の Wyrd（宿命的なもの）的世界においてであり愛するもの達の Fate でもある。同時に TC. の物語の主題の一つでもある Troy 没落とも密接に関係する。つまり TC. の面白味はこれからどうなるかわからない不測の出来事の期待ではなく，明確に判明している（Troy 物語は Audience が良く知っていた）宿命に向って突き進む姿のなかに若しろ suspense があるのだといえよう。[4] それは第一巻に暗示的な場面が見られる。

And namely, so many a lusty knyght,
So many a lady fressh and mayden bright,
Ful wel arayed, both meste, mene, and leste,
Ye, bothe for the seson and the feste,

Among thise othere folk was Ceiseyda,
In widewes habit blak; ...

(TC. 1-165～70)

ここに見られる word-play では単なる未亡人を象徴する "widwes habit blak" だけではなく彼女のこれからの行動を象徴して ominous でさえあ

る。それに続く描写ではその美しさにおいて比類のないことが描出され，次に続く叙述は blak を一層鮮明にさせている。

> Nas nevere yet seyn thyng to ben preysed derre,
> Nor under cloude blak so bright a sterre
>
> As was Criseyde, as folk seyde everichone
> That hir behelden *in hir blake wede.*
>
> (TC. 1-174～77)

暗い雲の下に美しく輝く星であるといっているのだが，その真偽は第一巻の第31スタンザの "O blynde world, O blynde entencioun !" (TC. 1-211) と呼応してこの TC. を運命づけている。もともとこうした blak の ominous な使用と共に TC. の冒頭が "The double sorwe of Troilus to tellen" (TC. 1-1) であり，かつ "Fro wo to wel, and after out of joie" (TC. 1-3) という事物の表裏，言い替えれば物事の明暗を描出している事から始まっている。Audience はこれらの表現を通して第二巻の "blak wawes" を聞く時に blak の意味を深さを認識するように思われる。また blak wawes の呼応は第二巻の 534 行の恋のとりこになる説明の部分 "For certes, lord, so soore hath she me wounded, / That stood in *blak,* with lokyng of hire eyen / …" の中に更に鮮明に闇からの誘いの如くに響いてくる。また面白いのは Troilus の心が Criseyde に通じて初めて手紙を貰らう場合に "Have here a light, and look on al this blake !" (TC. 2-1320) と Troilus は叫ぶが，"light" を燈しても闇の世界は開かれなかったのではあるまいか。しかしこの二重のイメージは同じスタンザ "glade and quake" (TC. 2-1320)，また "hope or drede" (TC. 2-1323) などでも Troilus の心の振幅ははっきりと描写されている。描写は明確であるが全体としての流れから考えると

ambivalence を伝えているという事である。しかし光と闇のコントラストといったが，これは私共全部の mutability に流れを持つといった方がいいようだ。

> The dayes honour, and the hevenes yë,
> *The nyghtes foo —al this clepe I the sonne—*
> Gan westren faste, and downward for to wrye,
> As he that hadde his dayes cours yronne;
> And white thynges wexen dymme and donne
> *For lak of lyght, and sterres for t'apere,*
> That she and alle hire folk in went yfeere.
> (TC. 2-904～10)

ここでは余りにも明るい場面であるが太陽が "The nyghtes foo" として出てくるしまた次の場面は nyghtyngale が輝ける月に向かって声高らかに愛の賛歌を歌いあげるがはたして〝月の光〟は Criseyde の願いにこたえるだろうか。

> A nyghtyngale, upon a cedir grene,
> Under the chambre wal ther as she ley,
> *Ful loude song ayein the moone shene,*
> Peraunter, in his briddes wise, a lay
> Of love, that made hire herte fressh and gay.
> (TC. 2-918～22)

これは別の言い方をすれば Criseyde を黄泉えと誘う事であり，その導き手は "The moone" である。それは夜の帳の中で骨のような白い羽根をつけた "egle"（わし）によって Criseyde は胸を引き裂かれるのであるが痛みを感じないのである（TC. 2-925～31）。このように blak を中心にすえて TC. を考える時，対立描写が如何に巧みに全体を形成させている

かを見ることが出来，Troilus と Criseyde の運命的出逢いがどのような過程を経て行くものなのかがわかる。またこれらの描写が TC. 全体の suspense を高めていることに気付くのである。こうした光と闇の世界はやがて Troilus をしてすべての事に気づかせるという事になる。

> "*O sterre, of which I lost have al the light,*
> With herte soor wel oughte I to biwaille,
> That evere derk in torment, nyght by nyght,
> *Toward my deth with wynd in steere I saille;*
> For which the tenthe nyght, if that I faille
> The gydyng of thi bemes bright an houre,
> My ship and me Caribdis wol devoure."
>
> (TC. 5-638～44)

Troilus は一人になった時に歌う lyric は "blak wawes"(TC. 2-1) の呼応をここに見出すのである。喜こびと悲しみとを見るはずになっているこの TC. は最後に Troilus が死して第八天に昇る場面において Troilus は遂に闇の世界に入る事になる。しかし Troilus にとってはこれこそが最も幸福な場面であろう。次の描写がそうである。[5]

> And whan that he was slayn in this manere,
> *His lighte goost ful blisfully is went*
> Up to the holughnesse of the eighthe spere,
> In convers letyng everich element;
> And ther he saugh, with ful avysement,
> *The erratik sterres,* herkenyng armonye
> With sownes ful of hevenyssh melodie.
>
> (TC. 5-1807～13)

彼の "lighte goost" は大宇宙の妙なる楽の音を耳にしつつ "the erratik

sterres (=wandering stars or planets)[6] を経巡る事となる。これは極めて異教的な物の考え方であり，己れもやはりさまよえる星の一つとなるのだ。[7] また同時にエジプト的な発想でもある。エジプト人はピラミッド時代に太陽の夜の運行に関する考えの一つとして，太陽神ラー (Rā) は大勢の家臣と共に夜の大宇宙を舟で航行しつつ，人々の死せる魂に一つ，一つ灯をともしながら夜明けを待ったとした。それにまた冥土はラーと共にオーサイリス (Osiris) の世界でもある。[8] オーサイリスは妻のイシスによって復活させられた経過を思い出すと Troilus は誰れによって魂の復活がなされたのであろうか。黄泉の世界を代表する彼の恋人である Criseyde ではなかっただろうか。そして第五巻の Epilogue において Narrator をしていわしめる "What nedeth feynede loves for to seke?" (TC. 5-1848) と結論はこうした光と闇の世界を経巡って来て初めて到達しうるものではなかろうか。しかしここに至っても依然として "earthly love" と "celestial love" の葛藤が見られるのだ。TC. の全体の中においてはこのような ambivalence の表現は色々な〝言葉〟の衣を纏いつつあらゆる場面に見られる。この TC. においてその姿がもっとも顕著に描写されているものとして blak を考えて見た。この夜や闇を描出する blak は，これをとりまく一連の語群によって TC. の suspense を盛り上げている。これは Troilus の死，それに伴なう昇天と共に blak は消失し星がそれにとって代るのである。丁度これは Shakespeare の Macbeth において nature が大宇宙の中で Macbeth を自由に遊泳させていたものが宿命によって己れの運命が明確なものとなった時，自由闊達に動きまわれる nature が消失し，Birnam wood が忽然と形をともなって現われるのに似ている。[9] TC. では blak が介在する the night—(blak)—the moone, the night—(blak)—the sterres が中心となり，the sonne—(blak)—the cloude, the hope—(blak)—the drede が関係し，the lyght—

(blak)—the derknesse が TC. の世界を支へ，かつ文体の形成に大きな力となっていることである。大きくは reason と desire，また ernest と game の関係，TC. の中で Criseyde が何度も叫けぶ honour と dishonour，trewe と untrewe など，人間の mutability にもとづくこれらの描出は blak の ambiguous な表現によって全体の suspense と共に Audience にせまるものと考える。[10] これはとりも直さず Chaucer の文体を形成するものであり，彼がどのように *Troilus and Criseyde* を創造して行くのかの過程を垣間見る一つの手段として blak を通して Chaucer の心の振幅にせまろうと考えている。

— **Notes** —

(1) このノートに使用する数字は *A Concordance to the Complete Works of Geoffrey Chaucer and to the Romaunt of the Rose* By J.S.P. Tatlock & A.G. Kennedy The Carnegie Institution of Washington 1927 (Reprinted by Senjo Publishing Company 1963) を使用。

(2) Norman Blake, *The English Language in Medieval Literature* Dent 1977 p. 114.

(3) 引用する TC. の例は F.N. Robinson, *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (Boston, 1957) を主として用いる。引用中のイタリック体は筆者のものである。

(4) G.L. Kittredge, *Chaucer and His Poetry* Harvard University Press 1946 p. 112.

(5) J.W. Conlee, *Ascension to the Eight Sphere* Chaucer Review Vol. 7 No. 1 p. 36.

(6) Norman Davis. *A Chaucer Glossary* Oxford 1979 p. 48.

(7) Franz Cumont, *Astrology and Religion among the Greeks and Romans* Dover Publications 1960 Lecture VI Eschatology Pp. 92-110.

(8) I.E.S. Edwards, *The Pyramids of Egypt* The Vikigng Press 1947 Pp. 15-16.

(9) Macbeth において 5幕2場における Angus の "Near Birnam wood / Shall we meet them, that way are they coming." の言葉以後 nature は姿を消す。

(10) Ida L. Gordon, *The Double Sorrow of Troilus*, A study of Ambiguities in *Troilus and Criseyde* Oxford 1970 p. 97.

（7月8日受理）